

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：20101
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2022
 課題番号：19K10928
 研究課題名(和文) “応援”概念に基づく精神障害をもつ人の子育て支援アプローチの開発に関わる研究

 研究課題名(英文) Development of a parenting support approach for people with mental disabilities based on the concept of Ohen

 研究代表者
 澤田 いずみ (Sawada, Izumi)

 札幌医科大学・保健医療学部・教授

 研究者番号：50285011
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：国内文献における概念分析の結果、医療分野の応援は、生き方に模索が続く健康課題をもつ人を対象として医療者が【自分らしくあることの困難性への共感】に基づいて、【その人が自分らしく生きるために味方になり新たな活動を試みる】ことで【その人の主体性の高まりに医療者としての自分らしさが充実していく】過程であることが示された。支援者対象のアンケート調査、並びに、当事者と支援者への面接調査は、概念分析の結果を概ね支持し、応援は、対象者に主体を置いた精神障害を持つ親へのアプローチの創出に寄与する概念であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 医療分野における応援は、生き方を模索する健康課題をもつ人を対象に、その人らしさを大切にしたいと願う医療者が新たな活動を実践すること、誰もが参加できる応援団というネットワークを形成することを助け、支援の拡充に寄与する概念であることが明らかになった。一般語であった応援を、精神障害を持つ親へのアプローチを創出する概念として記述することができた。日本人のもつ応援の実践知を支援システムへ包含できる可能性があり、誰もが自分らしく生きることを問われる少子高齢社会においても、日本独自の互恵的な支援パラダイムとなりうると考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study conducted a conceptual analysis in the articles published in Japan. The results show that in the medical field in Japan, Ohen is a process followed by health professionals to support persons who continue to explore how to live with health problems. In this process, health professionals feel 'empathy towards the difficulty of living in ways preferred by a person.' Based on the empathy, they 'Mikata-ni-naru (become a supporter for a person) so that the person can live in ways the person likes, and then try new activities' resulting in 'enriching the own identity as a health professional when seeing the person (patient) living as that person prefers'. The results of surveys of supporters, and interviews with the parents with mental disorders and their supporters, largely supported the results of the conceptual analysis, and showed that Ohen is a concept that contributes to the creation of a person-centered approach to parents with mental disorders.

研究分野：精神看護学

キーワード：応援 精神障害をもつ親 支援ネットワーク 概念分析

1. 研究開始当初の背景

精神障害をもつ親の支援ニーズは複雑であり、精神科医療機関の子育て支援への関与とネットワーク支援の充実が求められている。2004年、児童福祉法において、養育困難な家庭への連携支援の要として要保護児童対策地域協議会(以下、要対協)の設置が市町村に義務化されたが、メンタルヘルス問題を抱えている親に対し困難を感じる要対協構成員は多いとされている。一方、北海道浦河町では、1999年から、精神障害を抱える親である当事者と児童相談所を含む関連機関が一堂に会して支援を対話形式で検討する「応援ミーティング」¹⁾が実施され、現在は浦河町の要対協に位置づいている。メンタルクリニックにおけるグループ・個別の支援に加え、地域関連機関、ボランティアによる地域支援の連携の要となり、親子の成長を応援している。このような行政・専門機関で抱え込まない重層性のあるネットワーク支援が求められているが、そのユニークさゆえに“浦河だからできること”に留まっている現状にある。本研究は、“応援”を、ネットワーク支援における新たなアプローチを内包しうる概念と捉え、それを明らかにすることで浦河町の支援活動の普遍性を記述することを試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保健医療福祉分野における“応援”という概念を明らかにし、精神障害を持つ親への子育て支援における新たなパラダイムとアプローチを創出することである。

- (1) 目的1: 保健医療福祉分野の文献で使用されている“応援”の概念を明らかにする。
- (2) 目的2: “応援”の先駆的取り組みとして、北海道浦河町における精神障害をもつ親を対象とした当事者中心の対話型カンファレンス「応援ミーティング」参加者の“応援”のプロセスを明らかにする。
- (3) 目的3: 上記2つの分析から、応援モデルの妥当性の検証と、精神障害をもつ人の子育て支援に関わる応援力育成講習会の教材を作成する。

3. 研究の方法

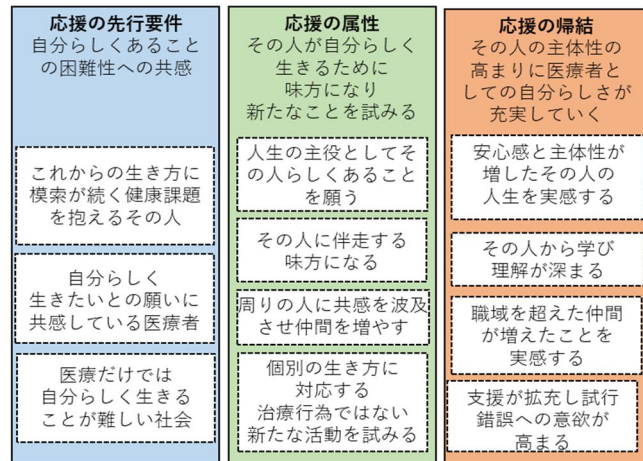
- (1) 目的1: 概念分析を行い保健医療福祉分野の文献における“応援”の概念を明らかにする
医学中央雑誌 web と最新看護検索等の国内の医療系文献のデータベースにおいて、“応援”をタイトルに含む文献を検索し、何らかの健康課題を有する人を対象に執筆者が実践していた文献を分析対象とした。Rodgers 手法に基づき、概念分析を行い、属性、前提、帰結を抽出しカテゴリーとしてまとめ、これから、応援の定義と概念モデルを記述した。
- (2) 目的2: 浦河町「応援ミーティング」参加者の応援プロセスを明らかにする
研究方法: グラウンデッドセオリーアプローチ
研究参加者: 浦河町応援ミーティングに参加している当事者を含む参加者 20 名に加え、理論的サンプリングに基づき参加者から紹介のあった地域支援者 10 名程度とする。
データ収集方法: インタビューガイドに基づき、半構成的な個別、又は、フォーカスグループインタビューを行い、IC レコーダーに録音し、逐語録を作成しデータとする。インタビューは、応援で行われることは何か、応援の過程でどのようなことが起こるのか、結果は何か等について尋ね、分析に応じてインタビューの内容は随時変更する。
データ分析方法: 継続的比較分析を行い、応援の前提要因、相互作用、帰結のプロセスを記述する。質的研究者からスーパーバイズを受けながら、分析を進める。
- (3) 目的3: 応援モデルの妥当性の検証と応援力育成講習会の教材作成
応援力育成講習会の教材を作成するために、まずは、目的1の研究から得られた、応援の定義と概念モデル(図1)の妥当性を検証することを目的に、支援者対象の講習会を試行的に開催し Google form にて応援の概念モデルの妥当性についてアンケート調査を実施した。

4. 研究成果

- (1) 目的1: 概念分析を行い保健医療福祉分野の文献における“応援”の概念を明らかにする
対象文献: 応援をタイトルに含み会議録を除いた国内文献を検索した結果、医学中央雑誌 web 版(以下、医中誌)では会議録を除き抄録がある文献とし 116 件が該当し、最新看護索引 Web <機関版>では 217 件、医学書院検索サイト Medical Finder では 57 件が該当した。ハンドサーチによる 10 件を加え、そのうち重複した文献を除き、何らかの健康課題ある人を対象に執筆者自身が応援を実践していた 29 件を分析対象とした
応援の実践者と対象: 応援の実践者は、看護師が 10 件、医師の 7 件、ソーシャルワーカー 6 件であった。応援の対象者は、発達障害を含む精神障害を抱える患者・家族 16 件、精神障害をもつ親も含め子育てしている人 8 件、がんと慢性疾患を有する人が各 4 件だった。
分析結果: 前提要件 3 つ、属性 4 つ、帰結 4 つのサブカテゴリーから、各一つの【カテゴリー】が抽出された(図1)。医療分野の応援の実践者は、現行の体制の不十分さや超高齢化社会に、自分らしくあることの難しさを誰にでも起こりうる危機と認識し、これからの生き方に模索が続く健康課題を抱える人たちに対し【自分らしくあることの困難性への共感】を抱き、この共感に基づき【その人らしくあることの実現のために味方になり新たなことを

試み】ていた。味方になるとは、その人の生き方を重視し、医療情報を分かり易く伝えること、対象者と願いを共に考え支えること、対象者の思いを代弁し共感を周囲に波及させ仲間を作ることにより、その人らしさを支えることであった。その過程で、対象者の主体性が増した姿に、新たな学び、職域をこえた仲間が増え、支援が拡充していくことを仲間とともに実感し、次なる活動への意欲を高め、【その人の主体性の高まりに医療者としての自分らしさの充実】が生じていた。以上から、医療分野における応援は、「医療者が、自分らしさを模索する健康課題をもつその人の味方になり新たな活動を試みることで、医療者自身も自分らしさが充実していく過程である」と定義された。

考察：医療分野の応援は支援と異なるというよりも、支援者が対象者を主体に置いた個別性の高い支援を実現することや、「応援団」という支援ネットワークをつくること、それによって生じた相互成長を実感することを促進させる概念と考えられた。医療分野での応援は、医療者と対象者双方の「自分らしく生きる」ための主体性に関わる相互作用であり、対象者のその人らしさを大切にしたい医療者の新たな活動の創出を助ける概念と考えられ、精神障害をもつ親への支援構築に寄与する概念と考えられた。この結果は、医療分野における応援の初概念分析として、日本看護科学会誌 42 巻²⁾に、総説として掲載された。



□ : サブカテゴリー □ : カテゴリー

図1医療現場において健康課題を抱える人実践されている応援の概念モデル

(2) 目的2：浦河町「応援ミーティング」参加者の応援プロセスを明らかにする

対象：現時点で、浦河町にて応援を受けている精神障害をもつ親 3 名のグループと支援者 8 名のグループにフォーカルグループインタビューを実施した。さらに、支援者 4 名に個別インタビューを実施した。

分析結果：現在、親を対象としたグループインタビューについてオープンコーディングの段階である。「応援は自分を強くする」「応援は個別」「応援は循環している」など 75 個のコードが抽出されている。応援のプロセスとして、当事者自身の自分らしさが見えてくるプロセス、支援者と当事者の応援のズレと解消する対話のプロセスなどが抽出され、概ね、概念分析で得られた概念モデルとの一致をみている。支援者へのインタビューからは、関係性の対等性、その人を主体とすること、前向き子育てプログラム(Positive Parenting Program: Triple P)と応援概念の類似点など語られているほか、応援が弊害となる状況や応援が適さない状況など新たな側面も語られている。

今後：様々な状況、具体的な実践手法を含め多様なディメンションとプロパティの生成が予想される。応援の実践知の理論化を新たな研究テーマとして、インタビューの追加、フィールドワークの継続を通し、応援モデルの記述の緻密性を高める必要性が示された。

(3) 目的3： 応援モデルの妥当性の検証と応援力育成講習会の教材作成

支援者対象の講習会：a. 北海道内の精神看護専門看護師が中心となっていて定期的な学習会、浦河町の有志の子育て支援者が、今後の子育て支援について継続的に検討を行っている子育て応援会議にて、目的 1 の研究の成果として示された応援の概念のモデルについて報告した。

<a. 精神看護専門看護師の学習会>

対象：参加者 20 名のうち、精神看護専門看護師 4 名、大学教員 7 名、訪問間ステーション看護師 1 名、地域支援者 2 名、計 14 名から回答があった。

報告の方法：ZOOMにて 40 分の説明と 60 分の討議を行った。

アンケート結果：応援の定義の妥当性については、100%が「同意する」であったが、属性では 1 名、帰結では 2 名、定義では 1 名が「どちらとも言えない」の回答があった。応援概念の有益性については、13 名(92.9%)が「有益である」とし、11 名(78.6%)が「支援に変化をもたらす可能性がある」と回答した。自由記載では、「その人らしさへの伴走型の拡充に寄与する概念」「人と人の関係を基盤に行われる実践であり、心と心の共鳴するポジティブなケアであり精神看護で必要な概念」「支援よりも支援者と当事者の上下関係を緩和する概念」など肯定的意見が多く見られた。さらに、「その人らしさ、など応援概念の定義に関連するいくつかの言葉の意味が曖昧である」「臨床現場で使用されているイーミックを研究していくことも必要」「応援する側・される側の捉えについても知りたい」など、今後の課題を指摘する意見があった。精神科領域の実践者と研究者から、概念モデルの妥当性は、概ね支持されたと考えられた。

<b. 浦河町子育て応援会議>

対象：ZOOMで行われた浦河町子育て応援会議において、参加者約46名のうち、心理士1名、ソーシャルワーカー1名、精神保健福祉関連職種2名、里親1名、保育士1名、大学生1名、医師2名、不明1名の計10名から回答があった。

説明の方法：ZOOMにて、15分間でパワーポイントを用いて報告した。

アンケート結果：定義、先行提要件、属性、帰結について9名(90.0%)が「一致する」と回答した。また、応援は支援よりも、相手に主体を置く、個別性を尊重する、仲間が増える、自分らしさを大切にできる、元気が出るについて、9名(90%)が「そう思う」と回答した。自由記載では、「うめきながら考えながら協働作業で次の手を考える。これをやめないことが応援」「応援する側に当事者性が入ってくる。私も人生の様々なことに苦勞し悩む立場。そういう立ち位置を含む言葉として「応援」という言葉を使っている」「人を応援するという事は自分らしさとは何かということを考えさせられる機会になる」「応援は、人と人とお互い助け合いながら、つながりながら生きるオアシス」「あなたがどう思っているか、どう感じたか、対話を抜きに応援はない」という意見の一方で、「野球の応援のように、される側より、してる側が使ってる方が多い。支援者がマイペースで行える行為であり、される側は何も言えない」との意見もあった。浦河の応援実践者からも、概念モデルの妥当性は概ね支持されたと考えられた。一方で、当事者と実践者のズレに関わる記載が見られ、応援のネガティブな側面の記述が不足していることが示された。

5. 結論

国内文献における概念分析の結果、応援は支援者と対象者の主体性に関わる相互作用であることが示され、精神障害をもつ親への支援を創出する可能性のある概念であることを明らかになった。そして、精神看護の研究者・実践者並びに浦河町の当事者である親とその応援実践者への調査からは、本研究で示された応援の定義並びに概念モデルは概ね妥当であることが示された。今後、応援の概念モデルの洗練と理論の緻密化を行っていく必要性が示された。

<引用文献>

- 1) 伊藤 恵里子：応援ミーティング 当事者と支援者がともに安心とつながりを創り出す場 精神科クリニックの立場から (特集 つまづきが虐待にならないために：精神保健福祉士の強みを活かす)、精神保健福祉, 51(4), 360-363, 2020.
- 2) 澤田いずみ, 道信良子, 石川幸代, 小川賢一, 原田ひとみ：医療分野において健康問題を抱える人へ実践されている応援の概念分析. 日本看護科学会誌 42, 2022.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 澤田 いずみ, 道信 良子, 石川 幸代, 小川 賢一, 原田 瞳	4. 巻 42
2. 論文標題 医療分野において健康問題を抱える人へ実践されている応援の概念分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 652-660
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5630/jans.42.652	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 澤田いずみ	4. 巻 9
2. 論文標題 子どもの虐待防止における親支援プログラムの活用に関わる1考察～エコロジカルモデルの視点から臨床～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床教育学研究	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 澤田 いずみ, 道信 良子, 石川 幸代, 小川 賢一, 原田 瞳
2. 発表標題 医療分野において健康問題を抱える人へ実践されている応援の概念分析
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Izumi Sawada
2. 発表標題 REVIEW OF JAPANESE TRIPLE P RESEARCH PAPERS OVER FIFTEEN YEARS
3. 学会等名 HFCC2020 (Helping Families Change Conference) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 編集：加藤則子，柳川敏彦，分担執筆者：澤田いずみ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 診断と治療者	5. 総ページ数 141
3. 書名 「ちょっと困った」から「発達障害かな？」まで トリプルP前向き子育て17の技術改訂第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 幸代 (Ishikawa Yukiuyo) (30449988)	西武文理大学・看護学部・教授 (32417)	
研究分担者	塚本 美奈 (Mina Tsukamoto) (30608500)	札幌医科大学・保健医療学部・講師 (20101)	
研究分担者	道信 良子 (Ryoko Mlchinobu) (70336410)	札幌医科大学・医療人育成センター・准教授 (20101)	
研究分担者	小川 賢一 (Kenichi Ogawa) (10912511)	札幌医科大学・保健医療学部・助手 (20101)	
研究分担者	原田 瞳 (Hitomi Harada) (90720847)	西武文理大学・看護学部・講師 (32417)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------